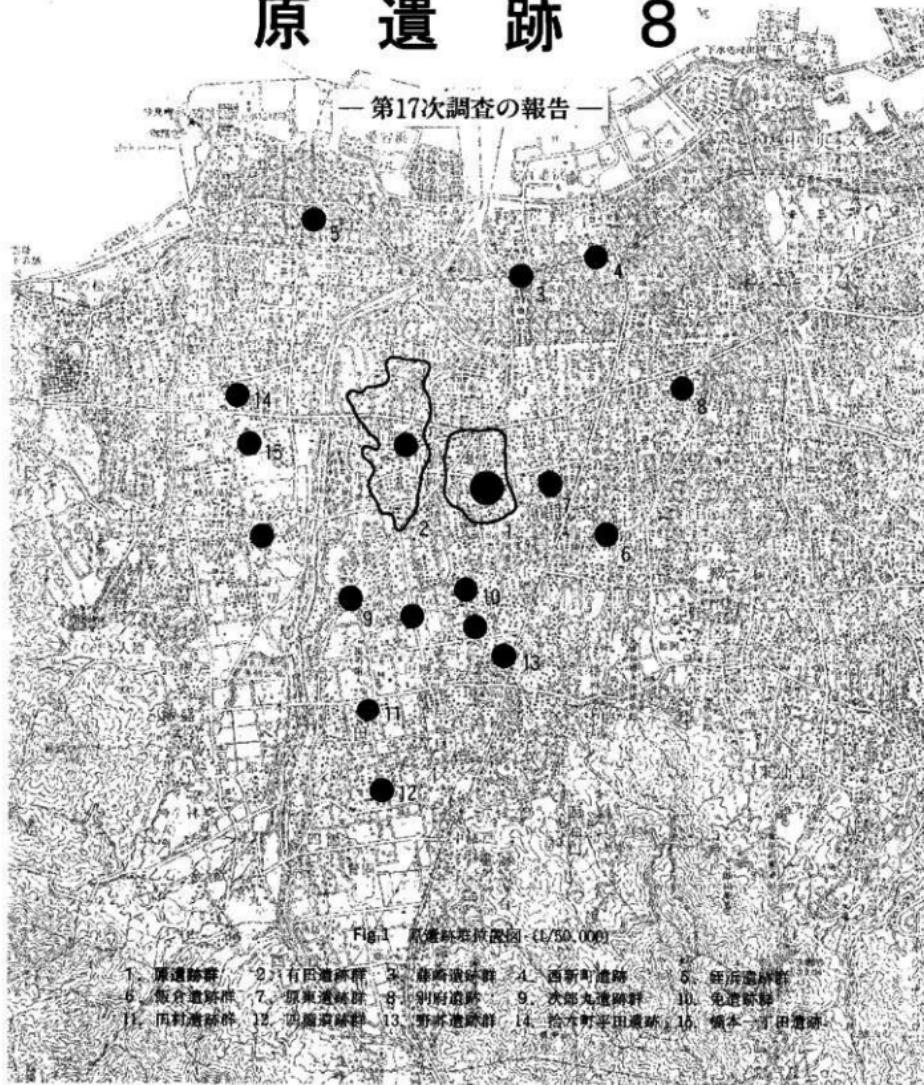


Hara
原 遺 跡 8

—第17次調査の報告—



1996

福岡市教育委員会

序

福岡市早良区原地区に所在する原遺跡群は、弥生時代から室町時代にかけての複合遺跡として知られています。今回この原遺跡群において、戸建て分譲住宅の開発が予定されたため、記録保存の発掘調査を実施しました。

調査では、原遺跡群では最も古い時期の弥生時代前期から中期にかけての集落を検出するなど、貴重な成果をあげることが出来ました。本報告書はその調査成果を整理し、報告したものです。本書が、市民の皆様の文化財保護に対するご理解の一助になるとともに、学術研究においても活用していただければ幸いです。

調査に際しましては、申請者の㈱末永ホーム 末永正信氏を始め、関係各位に多大なご協力を頂きました。心から感謝の意を表します。

平成8年2月14日

福岡市教育委員会
教育長 尾花 剛

例 言

1. 本書は、福岡市教育委員会が平成6年（1994）度に実施した原遺跡群の緊急発掘調査報告書である。
2. 遺構の実測は山崎龍雄、瀬戸啓治、金子由利子、清原ユリ子、堀川ヒロ子が行い、遺物の実測と図面の作成は山崎、井上加代子が行い、遺構と遺物の写真撮影は山崎が行った。
3. 遺構記号については埋蔵文化財センターの基準に従い、遺構番号についてはピット以外は性格を問わず通し番号にしている。
4. 本書に使用した方位は磁北であり、真北との偏差は西偏 $6^{\circ}21'$ である。
5. 調査にかかる記録類・出土遺物は埋蔵文化財センターで収蔵保管し、活用していく予定である。
6. 本書の執筆・編集は山崎が行った。

本 文 目 次

	頁
第1章はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 立地と歴史的環境	1
第2章 調査の記録	2
1. 調査の概要	2
2. 遺構と遺物	2
3. 小結	16

図 版 目 次

P.L.	①	頁
P.L. 1	① 調査区全景（南から）	Fig. 1 原遺跡群位置図 (1/50,000) 表紙
	② 調査区南側（北から）	2 調査地位位置図 (1/6,000) 3
	③ 調査区北側（北から）	3 各調査区土層 (1/40) 3
	④ 調査区南西側・S D24（東から）	4 遺構全体図 (1/200) 折込み
	⑤ 調査区南東側遺構検出状況（北から）	5 S B64と出土遺物・S C35 5
	⑥ 2区全景（西から）	(1/80・1/60・1/30・1/4)
	⑦ 3区全景（西から）	6 S C49・58 (1/60) 6
	⑧ S B64（南から）	7 各土坑 I (1/40) 7
P.L. 2	① S C35（南から）	8 各土坑出土遺物 I (1/4) 8
	② S C49（南から）	9 各土坑 II (1/40・1/60) 10
	③ S C58（南西から）	10 各土坑出土遺物 II (1/4) 11
	④ S K31（北東から）	11 各土坑出土遺物 III (1/3・2/3) 12
	⑤ S K36（南東から）	12 ピット実測図 (1/30) 12
	⑥ S K38（南西から）	13 各溝土層図 (1/40) 13
	⑦ S K39・40（北から）	14 各溝出土遺物 (1/4) 14
	⑧ S K57（西から）	15 ピット出土遺物 (1/4) 14
P.L. 3	① S K60（西から）	16 その他の遺構出土遺物 (1/4) 15
	② 各遺構出土遺物	17 ピット・その他の遺構出土遺物 16

挿 図 目 次

Fig.	頁
1 原遺跡群位置図 (1/50,000)	表紙
2 調査地位位置図 (1/6,000)	3
3 各調査区土層 (1/40)	3
4 遺構全体図 (1/200)	折込み
5 S B64と出土遺物・S C35	5
6 S C49・58 (1/60)	6
7 各土坑 I (1/40)	7
8 各土坑出土遺物 I (1/4)	8
9 各土坑 II (1/40・1/60)	10
10 各土坑出土遺物 II (1/4)	11
11 各土坑出土遺物 III (1/3・2/3)	12
12 ピット実測図 (1/30)	12
13 各溝土層図 (1/40)	13
14 各溝出土遺物 (1/4)	14
15 ピット出土遺物 (1/4)	14
16 その他の遺構出土遺物 (1/4)	15
17 ピット・その他の遺構出土遺物	16

(1/3・1/2・2/3)

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

平成6年11月4日、株式会社末永ホームと地主の大神三男氏から、調査地点に戸建て分譲住宅造成の為の埋蔵文化財事前審査願いが埋蔵文化財課に提出された。同年11月17日に試掘調査を行い対象地域全体に遺構が確認された。その結果をもとに申請者と調査計画についての協議を進め、恒久的構築物となる道路部分を調査対象として発掘調査を実施することとなった。発掘調査及び整理費用は原団者が負担し、調査は1995年2月6日から3月22日まで実施し、整理作業は1995年（平成7）年度実施した。

なお、調査にあたっては、申請者の株式会社末永ホームから全面的な協力を得て調査を進めることができました。この場をかりてご協力いただいた方々に感謝申し上げます。

2. 調査の組織

調査委託 株式会社 末永ホーム 末永正伸

調査主体 福岡市教育委員会

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾学（前任）、荒巻輝勝（現任） 第1係長 横山邦雄

庶務担当 西田結香 **試掘担当** 山口謙治 菅波正人

調査担当 山崎龍雄 **調査補助** 瀬戸啓治 **調査・整理作業** 大塙皓、甲斐正耕、木須昭三、真田弘二、中野三平、吉川春美、井釜庸子、金子由利子、清原ユリ子、下司昭枝、坂本ハツ子、佐藤テル子、指山歌子、指山弘子、東島直美、西尾タツヨ、堀川ヒロ子、松本ミツ子、水野由美子、門司弘子、有吉千栄子、赤星攝、池田礼子、吉良山直美、武田祐子、釣崎由美、塚本直子

3. 立地と歴史的環境 (Fig.1・2)

原17次地点が所在する原遺跡群は、福岡市西部に広がる早良平野の中央やや東寄りに位置する。現在の行政区分で言えば、早良区原5丁目から8丁目にわたる地域で、遺跡の範囲は東西600m、南北600mに及ぶ。

早良平野は上朗川や室見川、金屑川などの南北に貫流する中小の河川によって形成された沖積平野である。原遺跡群は中央を流れる室見川の東側を流れる金屑川の東、標高6～7mを測る微高地にある。すでに市街化が進んでいるせいか、微高地としての高まりは余り感じさせない。

周辺の遺跡については、金屑川を挟んで西側には有山遺跡群がある。現在180次の調査次数を数え、旧石器時代から近世まで連續と続く大遺跡で、その成果については膨大な調査報告書にまとめられている。北側海岸部の砂丘上には藤崎遺跡や西新町遺跡などの弥生時代から古墳時代にかけての大集落遺跡がある。東側には飯倉遺跡群があり、南側には弥生時代から古墳時代にかけての大規模な井堰が出土した免遺跡群、古墳時代の集落遺跡である野茶大敷遺跡、中世集落の田村遺跡などがある。また原遺跡群から南側には古い地図では条里制の地割りが残っていた。

以上立地と歴史的環境について述べたが、その詳細な概要については、従来の調査報告書で述べられているので、それらを参考にされたい。

第2章 調査の記録

1. 調査の概要 (Fig. 3, PL. 1-①~⑦)

今回の調査は、水田であった申請地を埋め立て、そこに戸建て分譲住宅を建設する計画であった為、恒久的構築物となる道路部分についての調査を実施した。しかし、調査区境界にかかった遺構については調査区を拡張し、また溝については新たに調査区（2～4区）を設定し方向を確認した。調査面積は申請面積2881m²中の730m²である。調査区の標高は地表で6m位である。調査区の西側は飯原小学校の建設に先立っての第3次調査で古墳時代前期の大溝が調査され、弥生時代前期から古墳時代後期にかけての遺物が出土した。今回の調査では第3次調査とほぼ同じ時代幅の遺構と遺物が発見された。遺構面は20cm～30cm位の深さで、南側がやや浅い明黄褐色シルト質粘土で、北側は褐灰色礫混じりシルトである。遺構面は比較的削平を受けていたようで、残りは余り良くなかったが、南側を中心に遺構は検出された。北側は中世の頃に地下げがあったのか、弥生時代から中世の遺物を含む黒色の整地層があり、遺構面に凹凸があり、遺物が地表に食い込んでいた。検出遺構は掘立柱建物1棟、堅穴住居址3軒、溝4条、土坑31基などである。

2. 遺構と遺物

掘立柱建物

S B64 (Fig. 5, PL. 1-⑧)

調査区南側で検出されたが、道路幅の狭い調査区のため、いまひとつ不安が残る。主軸をほぼ磁北のN-2°30'-Eに取る建物で、規模は桁行全長6.08m、梁行全長3.78m、床面積22.98m²を測る。総柱の建物で、南北梁側の外に棟持柱P14・15がある。P8の床面には焼上面とぼろぼろの甕の破片があった。

出土遺物 (Fig. 5) 各柱穴から弥生時代の土器片が出土している。須恵器などは含まず、それ以前の時期であろう。1はP1から出土した壺底部1/4片で、復元底径9cmを測る。外面調整は板ナデである。

堅穴住居址

S C35 (Fig. 5, PL. 2-①)

調査区西側で出土した規模が2.7×3.1mを測る小型の方形住居址である。残りは非常に悪く、周壁溝と焼上面が残るだけで、屋内土坑や柱穴は確認出来ない。焼土面は北東隅に寄っている。

出土遺物は少なく、床面と壁溝から数点の土器片が出土しているだけである。

S C49 (Fig. 6, PL. 2-②)

調査区の南東側で検出したもので、S C58に切られる。床面の汚れやかすかに残る焼土面、屋内土坑S K54からやや長方形状の住居と判断した。住居址の規模は4.7×6m位か。柱穴は2本と考えられ、柱間隔は2.4mを測る。焼土面は主柱穴間中央やや西寄りにあるが、余り強くは焼けていない。また南壁際には1×0.8mを測る平面不整長方形の土坑S K54があり、床面中央が一段深くなる形態から出入り口と思われる。この土坑の両側には間仕切りの小溝がある。本来はベッド状遺構を持った住居址で、汚れた床面は貼り床であろうか。

出土遺物 床面及び貼り床、土坑から弥生土器から土師器の細片、黒曜石の剥片などが出土しているが、大半は小片で、量は少ない。

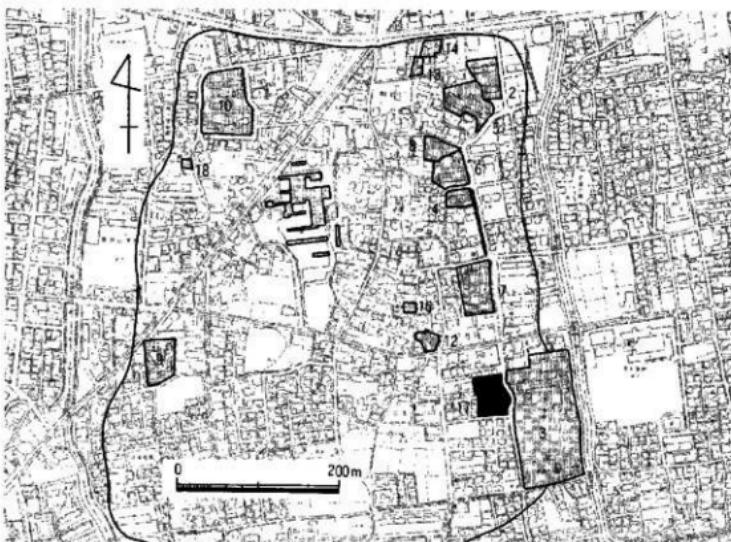


Fig.2 調査地点位置図 (1/6,000)

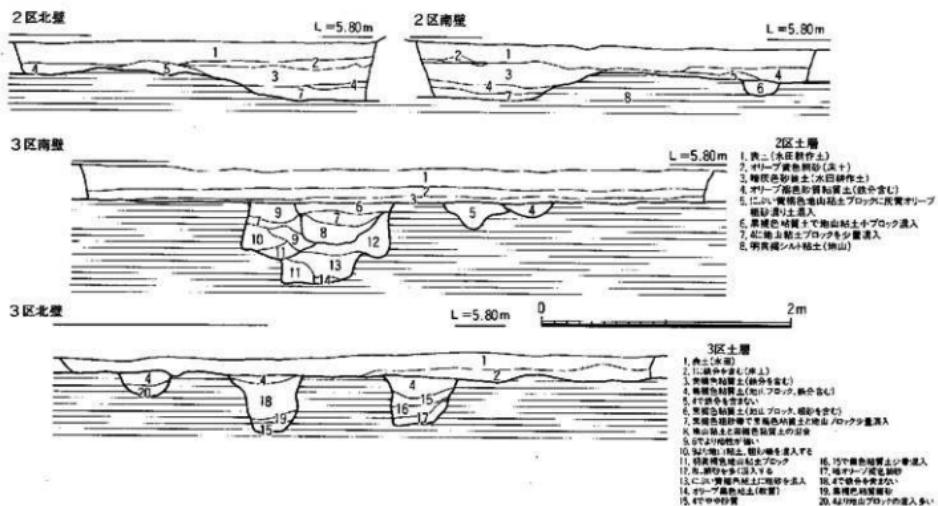


Fig.3 各調査区上層 (1/40)

S C58 (Fig. 6, PL. 2-③)

S C49を切り、S D50~52に切られる長方形の住居址。残りが悪く、床の汚れと部分的に残る周壁溝から規模を測ると、 $4.7 \times 6\text{ m}$ を測り、S C47とはほぼ同規模である。床面には多くのビットがあるが、主柱穴は2本で、その間隔は3.2mを測る。南壁側にはS C47と同じように、 $0.9 \times 0.8\text{ m}$ の不整方形の土坑SK56がある。床面は貼り床されている。主柱P 2近くに焼土面があった。

出土遺物 (Fig.11) 床面及び床下から弥生土器から土師器の細片が少量出土している。図示しうるものは少ない。31は回基の小型の石鐵で、石材は黒曜石。鐵身1.6cm、幅1.8cmを測る。

土坑

31基検出した。出土分布は調査区の南側に集中している。

S K19 図示していないが、 $70 \times 80\text{ cm}$ をかる楕円形状の深さ15cmの浅い土坑。埋土は黒褐色土に黄色の地山ブロックを含む土である。

出土遺物 (Fig.8) 弥生土器の細片が少量、石器としては剥片が1点出土している。2は弥生中期中頃の甕口縁部1/6片で、復元口径23.6cmを測る。外面ハケ、その他はナデ。

S K20 図示していないが、 $106 \times 66\text{ cm}$ の主軸が東西方向の楕円形状の土坑。深さは15cmを測り浅い。埋土は黒褐色土を主とし、地山土を含む。出土遺物は弥生土器を少量含む。

S K23 (Fig.7)

3 B区で検出したS D24に切られる不定形の土坑。規模は $200 \times 135\text{ cm}$ を、深さは浅く9cmを測る。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生上器の細片が少量出土している。

S K25 S D24に切られる楕円形状の土坑。 $125 \times 70\text{ cm}$ 、深さは13cm程を測る。溝の両側がビット状に落ち込む。埋土は黒褐色土を主体とする。出土遺物は弥生土器の細片をわずかに含む。

S K26 (Fig.7)

4 A区で検出した主軸が東西方向の隅丸長方形状の土坑。 $160 \times 96\text{ cm}$ の規模で、底面は東側に階段状に深くなり、最大深は25cmを測る。埋土は黒色粘質土で黄色地山上を少し含む。出土遺物は弥生土器の細片が大ビニール袋1袋程出土したが、図示できるものはない。

S K27 (Fig.7)

4 B区で検出した南北主軸の長楕円形状の土坑。規模は $138 \times 70\text{ cm}$ 、深さは15cmを測る。土坑断面は逆台形で、中央がわずかに深い。埋土は上層がにぶい黄褐色粘土で鉄分を含み、下層は黒褐色粘質土となる。

出土遺物 (Fig.11) 古式上部器らしき破片を少量含む。32は石鐵の破片。石材は安山岩である。

S K28 (Fig.7)

南側の4 B区で検出した主軸を東西方向に取る細長い土坑。東側はビットで切られ、規模は $186 \times 60\text{ cm}$ 、深さは20cm弱である。底面の西壁と南壁沿いには4か所ビット状の落ち込みがある。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器の甕の脇部の破片などが少量出土した。丹塗りの土器の破片もある。

S K29 (Fig.7)

S K28の南側で検出した主軸を南北に取る隅丸長方形状の土坑。規模は $137 \times 51\text{ cm}$ 、深さは20cm強を測る。断面は丸みを持った逆台形で、埋土は黒褐色粘質土に黄褐色地山土を含む。

出土遺物 (Fig.8, PL. 3-②) 弥生土器から土師器の細片が少量出土した。3は上部器の完形の皿で、口径10.2cm、器高1.1cmを測る。調査はナデで外底に板状压痕が残る。胎土は砂粒を多く含む。

S K30 (Fig.7)

S K29の南にある東西方向の西洋梨形の土坑。規模は $122 \times 55\text{ cm}$ 、深さは13cmほどを測る。底面は東



Fig.4 遺構全体図 (1/200)

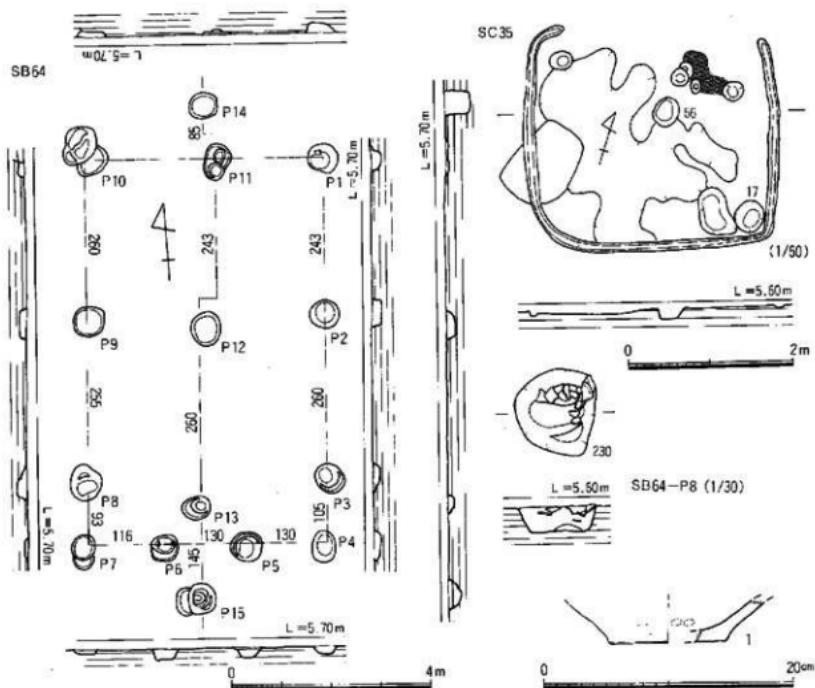


Fig. 5 SB64と山上遺物・SC35 (1/80・1/60・1/30・1/4)

側がテラス状に高い。西側はやや凹凸がある。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器の甕などの底部片を中心に少量出土している。

S K31 (Fig. 7, PL. 2-④)

南側調査区4C区で検出した不整円形の土坑。規模は86×68cm、深さは36cmを測る。断面は箱形で壁はややオーバーハンプする。埋土は黒色粘質土で炭化物を含み、下層ほど粘性が強く、炭化物も多い。遺物は内側に床からやや浮いた状態で検出された。

出土遺物 (Fig. 8) 弥生土器の甕などの破片が出土した。蓋的には多いが、図示出来るものは少ない。他に石器の剥片なども少量含む。4～6は中期前半から中頃の甕で、4は底径6.3cmを測る底部片で、外表面は丁寧なハケ。5は逆L字形の口縁部1/4片で、口径30.4cmを測る。外表面はハケがかすかに残る。6はく字状を呈す口縁1/8片で、復元口径は27.4cmを測る。口縁直下に突唇がある。

S K32 (Fig. 7)

4C区で検出した南北主軸の方形の土坑。規模は104×65cm、深さは36cmを測る。断面は壁が直立する箱形で、埋土は黒色粘土を主体とし、黄褐色地山土を含む。出土遺物はない。

S K33 長方形の浅い土坑。規模は80×66cm、深さは7cmを測る。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器、黒曜石の小剥片が合わせて5点出土した。

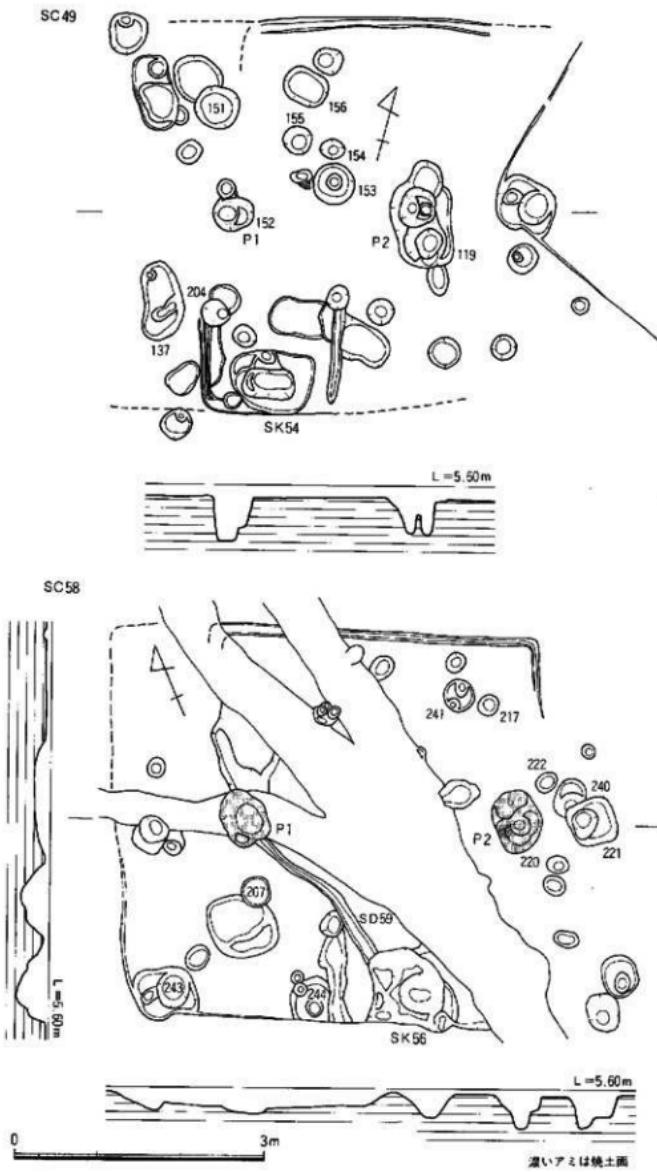


Fig.6 S C49・58 (1/60)

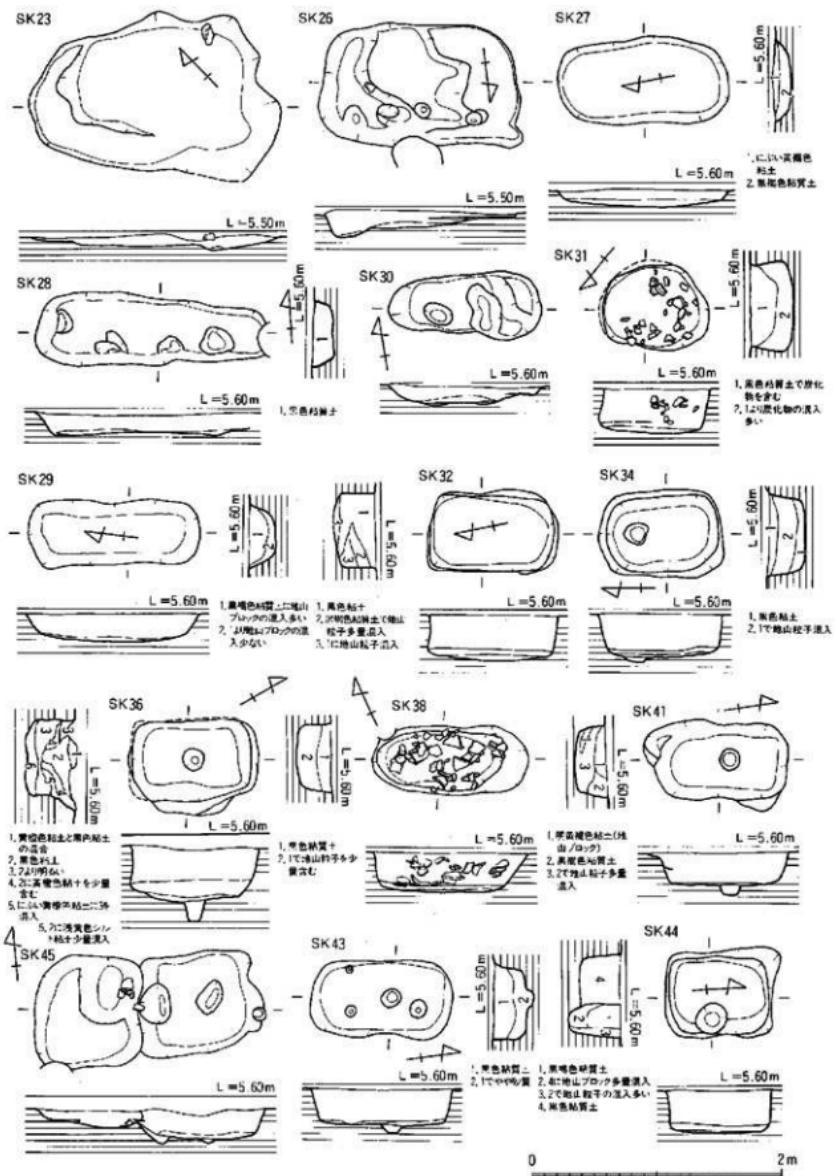


Fig.7 各土坑 I (1/40)

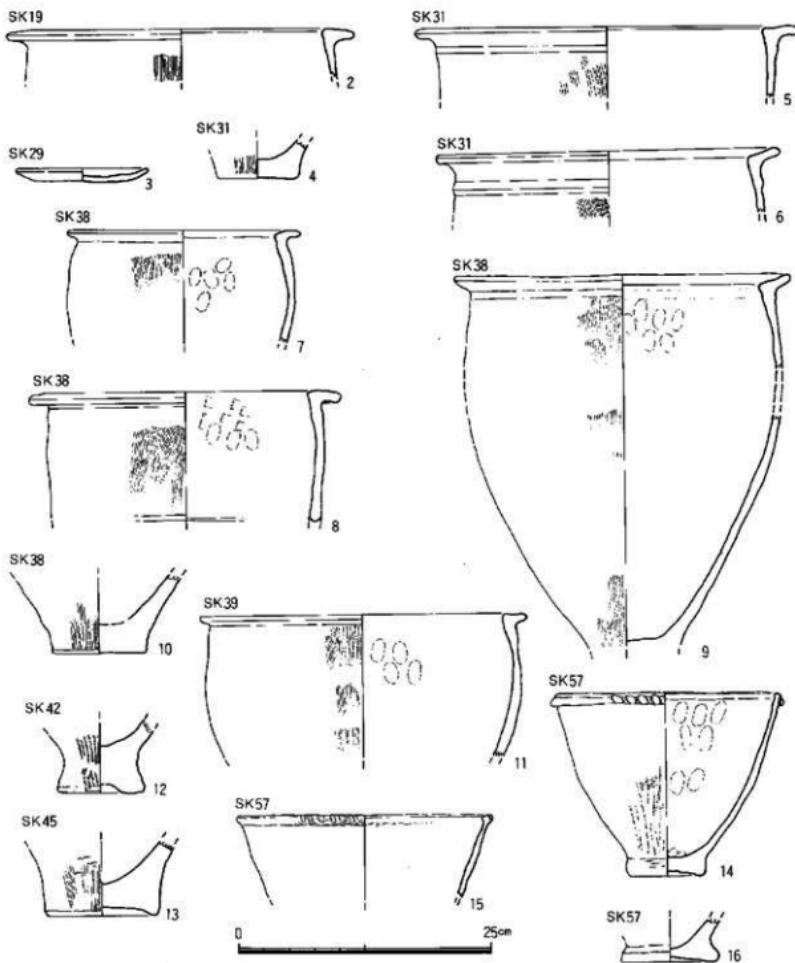


Fig.8 各土坑出土遺物 I (1/4)

S K 34 (Fig. 7)

4 B 区で検出した南北方向の隅丸長方形の土坑。規模は $100 \times 70\text{cm}$ 、深さ 35cm を測る。底面は平坦で、北壁寄りに直径 20cm 、深さ 5cm ほどのビットがある。埋土は黒色粘土を主体とする。遺物の出土はなし。

S K 36 (Fig. 7, PL. 2-⑤)

S C 35 の西壁下で確認した長方形の土坑。規模は $104 \times 76\text{cm}$ 、深さは 40cm を測る。底面中央には直径

18cm程の円形ピットがある。断面は箱形を呈す。埋土は黒色粘土と黄褐色粘土が主体である。出土遺物は土器の細片や石器の剥片が少量出土している。

S K37 5 A 扱張区で検出した精円形状の浅い土坑。規模は106×80cm、深さは10cmを測る。埋土は黒色粘土を主体とし、地山粘土を含む。遺物は弥生土器の壺胴部細片を2点含む。

S K38 (Fig. 7, PL. 2-⑥)

S K30の東で検出した長楕円形の土坑。規模は124×56cm、深さは31cmを測る。埋土は黒色粘質土である。廐棄物処理土坑なのかな、内部から弥生中期中頃の遺物がやや多く出土した。

出土遺物 (Fig. 8・11, PL. 3-②) 7～9は壺の口縁部片。7の口径は18.6cmを測り、胴部はやや膨らむ。外面はハケ、内面はハケで指圧痕が残る。口縁下には煤が付着する。8は1/4片で、復元口径24.7cmを測る。特殊な形態で胴部に方形の窓があく。窓の側面は丁寧に擦られる。外面はハケ、内面はヘラ状工具によるナデ。胎土に粗砂を多く含み、焼成は良好。9は1/3片。復元口径26.2cm、器高30cm以上を測る。表面は磨滅するが、外面ハケ、内面はナデで煤が上半に付く。10は底部1/3片。外面ハケ、内面はハケ。25は棒状の形態の叩き石か。上下両面は擦り、側面・端部は敲打痕が残る。石材は砂岩。26は砥石片で残存長は12cm。27は砥石か敲石か。26・27いずれも砂岩。

S K39 (Fig. 9, PL. 2-⑦)

調査では埋土の違いで分離したが、S K40と床面レベルが同じで、埋土の違いだけの同一構造の可能性が強いので合わせて報告する。規模は231×162cmを測る溝丸長方形土坑。いずれも埋土は黒色粘質土でS K40部分には黄褐色の地山粘土ブロックを含み、S K39部分には焼土・炭化物ブロックを混入する。堅穴住居址の床面かとも考えたが、焼土面、柱穴がなく、別の性格の構造であろう。

出土遺物 (Fig. 8・11) 弥生土器の壺や鉢などの破片が出土している。量的には多いが、大半が細片で図示出来るものは少ない。石器としては砥石片ほか、黒曜石の剥片が数点出土している。11は弥生土器の壺口縁1/4片で復元口径25.7cmを測る。外面ハケ、内面はナデである。胎土に粗砂を多く含む。28は砥石で、石材は目の細かい砂岩か。上下・両側面が使用面。現存長7.3cm、幅4.3cmを測る。

S K41 (Fig. 7)

南北方向の溝丸長方形の土坑。規模は116×64cm、深さは25cmを測る。底面中央に直径15cmの小ピットがある。断面は逆台形で、埋土は黒褐色粘質土と地山粘土の混合。出土遺物はない。

S K42 (Fig. 7)

S K39を切る不整精円形の土坑。規模は92×70cm、深さは12cmを測る。底面の両側にテラスを持つ。埋土は黒色粘質土が主体。

出土遺物 (Fig. 8) 弥生土器の壺の破片などが少量出土した。12は中期前半の壺の底部1/2片。復元底径6.7cmを測る。外面粗いハケ、内面はナデ。

S K43 (Fig. 7)

5 C 区で検出した南北方向の溝丸長方形の土坑。規模は112×64cm、深さは28cmを測る。底面に小ピットが4個ある。断面は逆台形、埋土は黒色粘質土を主体とする。出土遺物はない。

S K44 (Fig. 7)

D 5 区で検出した南北方向の長方形の土坑。規模は84×72cm、深さは32cmを測る。東壁にピットが切り、断面は壺がほぼ直の箱形を呈す。埋土は黒色粘質土である。出土遺物はない。

S K45 (Fig. 7)

S C35の西、S D24に切られる2基の方形土坑が合体したような長方形の土坑。規模は184×90cm、深さは西側で14cm、東側で24cmを測る。埋土は黒色から黒褐色粘質土を主体とし、地山土ブロックを

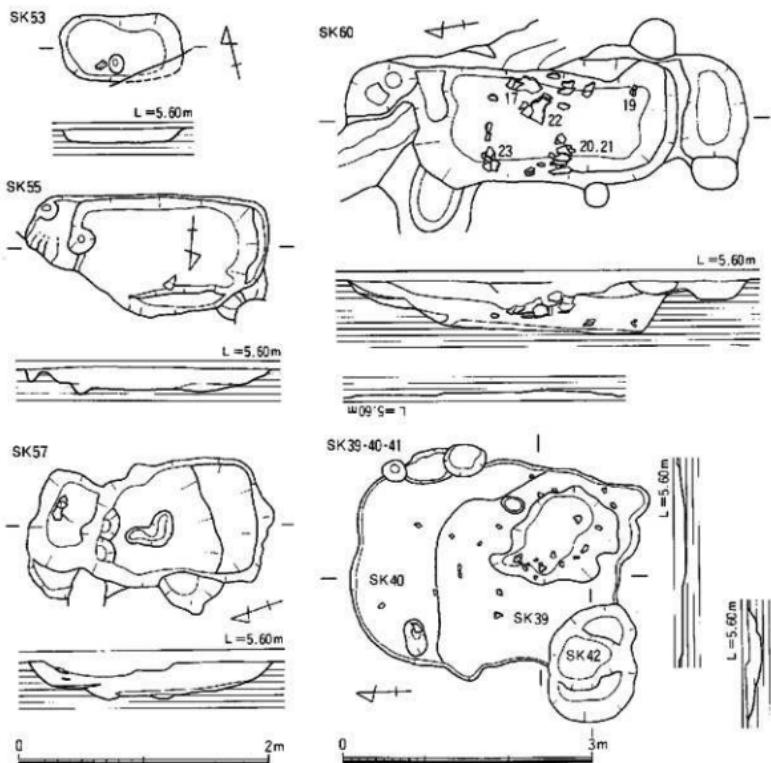


Fig.9 各土坑II (1/40・1/60)

含む。

出土遺物 (Fig. 8・11) 弥生土器の壺の破片などが少量出土した。13は弥生土器の壺の底部1/2片、やや上げ底で、復元底径8.6cmを測る。29は石包丁片で、粘板岩か。30は用途は不明だが、使用痕が残る。堆積岩系の石材か。

SK48・63 5B拡張区で検出したSK63に切られる隅丸長方形状の土坑。48の方が切る。埋土は黒色粘質土を主体とする。出土遺物は突帯文土器片1点を含む土器の細片が11点程ある。

SK53 (Fig. 9)

S C49に切られる隅丸長方形の土坑。規模は97×51cm、深さ10cmを測る。埋土は黒色粘質土である。出土遺物は弥生土器の壺の胸部片が少量出土した。

SK55 (Fig. 9)

S D51に切られる南北主軸の方形状の土坑。規模は194×98cm、深さ18cmを測る。両小口側と北側がテラス状に一段高い。黒色粘質土と黄褐色粘土を主体とする。出土遺物は弥生土器の破片が出土した。古式土師器の口縁部片を1点含む。

SK57 (Fig. 9, PL. 2-⑧)

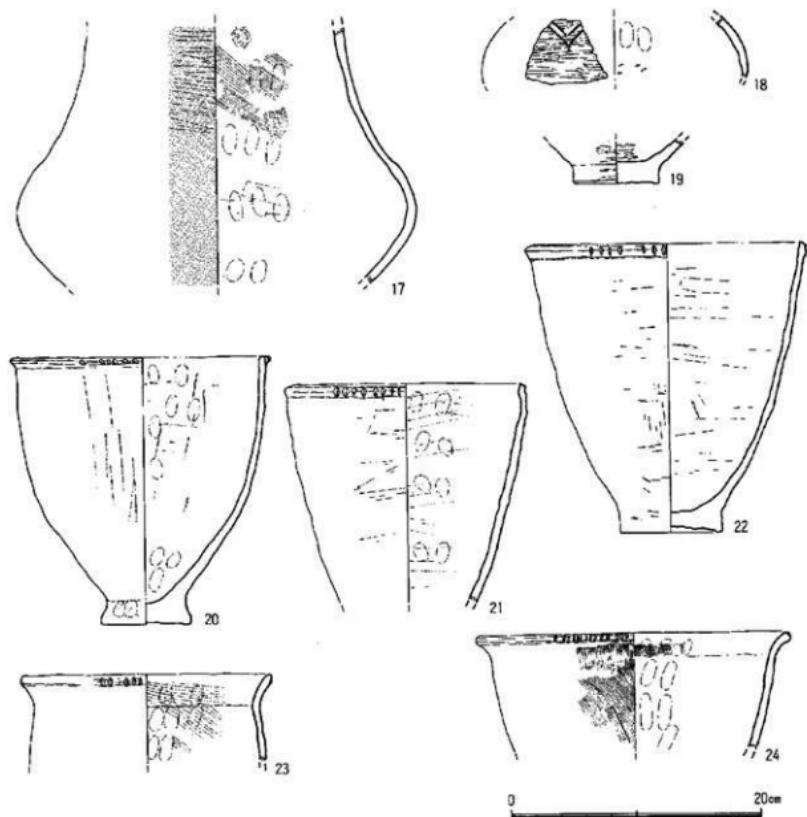


Fig.10 各土坑(S K60)出土遺物 II (1/4)

S C47・58、S D51に切られる不整長方形状の上坑。規模は196×100cm、深さ25cmを測る。北小口部はテラス状を呈す。埋土は黒色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 8、PL. 3-②) 弥生土器の細片が少量出土している。他に石器の剥片が1点出土している。14~16は夜白式土器の突帯文土器の甌。14は1/2片で、復元口径17.7cm、器高14.6cmを測る。口端部直下に1条の突帯が付き、棒状工具による刻み目がある。底部は上げ底。胴外面から外底はナデで下半は条痕が残る。内面はナデで指圧痕が残る。15は口縁部1/8片で突帯が口端部に付く。復元口径は20.4cmを測る。外表面ナデで煤が付き、内面はナデで口縁部近くに工具痕が付く。16は貼り付け円盤状の上げ底の底部片。胎土は14が粗砂を多く含むが、15は精良。16は赤色粒子を含む。

S K60 (Fig. 9、PL. 3-①)

4D拡張区で検出したSD52に切られる南北方向の長方形状の土坑。規模は320×111cm、深さ42cmを測る。北小口部はSK61、南小口は中間に脊を持って楕円形の土坑状に壅む。底面は北から南へや

や下傾する。埋土は黒色粘質土を主体とし、黄橙色粘土を含む。廃棄物処理土坑か。

出土遺物 (Fig.10, PL. 3-②) 弥生前期初頭の土器の壺・甕などの破片を多量に含む。石器も黒曜石の剥片などを少量含む。17は大型の壺腹部1/3片で、復元底部最大径31.8cmを測る。腹部と頸部の境に段を持ち、頸部は長い。外面丹塗り研磨。内面ナデで頸部内面はハケを施す。18は小型の壺腹部小片。外面ヘラ研磨で山形沈線を2条加える。内面はナデ。19は底部1/2片で復元底径7cmを測る。内外面ヘラ研磨、外底はヘラナデ。胎土は17が粗砂を多く含む。色調は17が丹塗り、18・19は黒色を呈す。20～24は甕で、口縁部に一条の貼り付け突帯を巡らす。突帯にはヘラ状工具による刻み目を加える。内外面ヘラ状工具によるナデを加える。底部は上げ底である。20は1/2片で復元口径20.5cm、器高21.3cmを測る。21は1/2片で復元口径19.4cmを測る。22は1/3片で、復元口径22.6cm、器高23cmを測る。いずれも胎土に粗砂を多く含む。23・24は口端部に刻み目を持ち、内外面にハケ目を加える。23は1/6片で復元口径19.5cmを測る。24は1/4片で、復元口径24.6cmを測る。いずれも胎土に粗砂を多く含む。

溝

S D 01 (Fig.13)

南側調査区東端で検出した。上面は最近までの道路、その下が溝となる。溝の規模は幅120cm前後、深さは60cm前後を測る。埋土は2段階に分かれ、下層は灰オリーブ粘質土から灰色粘土で、底には細砂を含む。上層は黄橙色粘土と黒褐色粘質土を主体とする埋め立て土である。東壁が抉れていることから水流があった。

出土遺物 上層では時期不明の土器片他、国産染付片、中層では弥生土器から土師器、中世の中国産白磁・青磁、土師器皿、下層では弥生土器から土師器の細片が出た。

S D 24 (PL. 1-④)

西側調査区で検出した南西から北東に延びる小溝。調査区内で立ち上がりを持つ。溝幅は狭く、15～30cm、深さは最大で10cm位である。埋土は黒褐色粘質土である。遺物から見て弥生時代か。

出土遺物 (Fig.17) 弥生土器の甕などの破片が出土している。大半が細片である。60、61・75は石器。60は火成岩系石材の石斧片。61は扁平片刃石斧か、現存長5cm、幅2.7cmを測る。74は一等辺三角

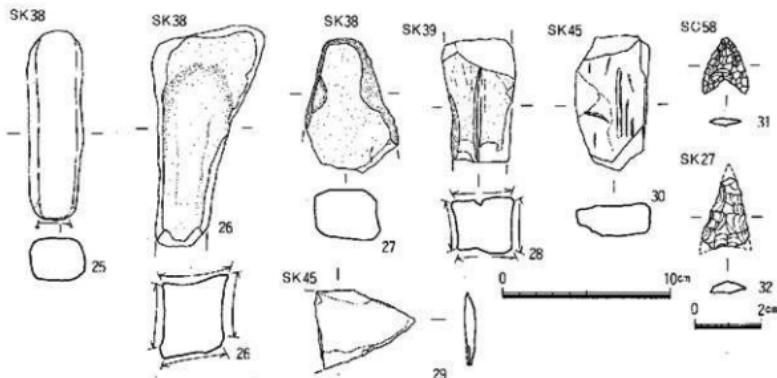


Fig.11 各土坑出土遺物Ⅲ (1/3・2/3)

形状の石鎚。鬚身長2.1cmを測る。石材は安山岩か。

S D47

5D拡張区で検出した溝で延長は不明。埋土は黒褐色 SP123
粘質土。中から土器の破片が出土している。

出土遺物 (Fig.13・17, PL. 3-②) 弥生前期末からの大土器が出土。石器としては石斧片などが出上。33~35は前期末から中期初めの壺。33は1/8片で、復元口径22cmを測る。外面ハケ、内面ナデ、34は金海式壺の口縁部小片。口端部上部角に刻み目が付く。35は底部1/6片。底部は円盤状を呈し、上げ底か。いずれも胎土に粗砂を多く含む。62は砂岩製砥石の細片。各面研磨として使用する。63は敲石。全長14.6cm、断面は円形で直径は6.8cmを測る。全面研磨の白色の玄武岩か。

SD50 (Fig.13, PL. 1 -⑤)

南側調査区東側で検出した南北方向の小溝。3区抜張区の東側の溝の続きと考えるが、その延長は不明。SD 51・52を切る。幅は40~80cm、深さは17~50cmを測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とし、底には暗灰色砂を含む。溝底は流水があったようで、凹凸が激しい。3区では土坑と重複している。下層から江戸時代の寛永通寶が出土しているが、出方から後世の混入と考える。

出土遺物 (Fig.14-17, Pl. 3-②) 弥生土器から土師器・須恵器、中世陶器片が出土した。大半が細片で図示出来るものは少ない。石器が少量と古墳時代の勾玉が1点出土した。土師器の複合口縁壺片があり、住居址からの混入か。36・37はいずれも口径9cm、器高は1.4cm、1cmを測る土師器皿。ほぼ完形で外底には糸切り痕と板目が残る。3区の溝のほぼ中位で出土。38はミニチュア上器底部1/3片、39は土師器の高环坏部1/4片、復元口径17.7cmを測る。64は頁岩の柱状片刃石斧片か。72は江戸時代の寛永通寶。直徑2.5cmを測る。裏面に文の字がある。73は滑石製の勾玉。全長2.2cm、最大幅0.9cmを測る。72は上から切り込むピットの底から出土し、73は溝底から出土した。

S D51 (Fig.13, PL. 1 -⑤)

S D50・52に切られ、北西方向に延びる溝。南東延長は不明でS D50か52に重なるものと考える。

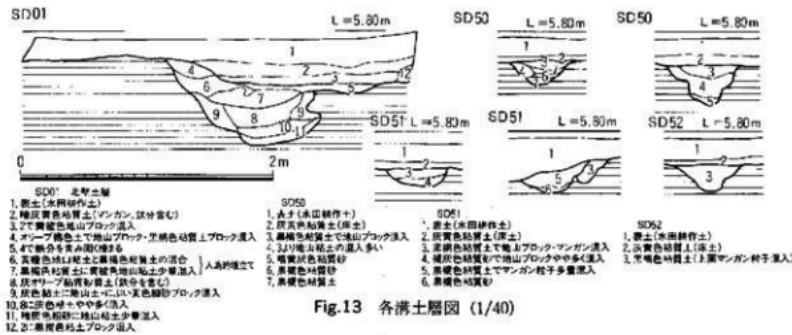


Fig. 12 各種土壤圖 (1/2)

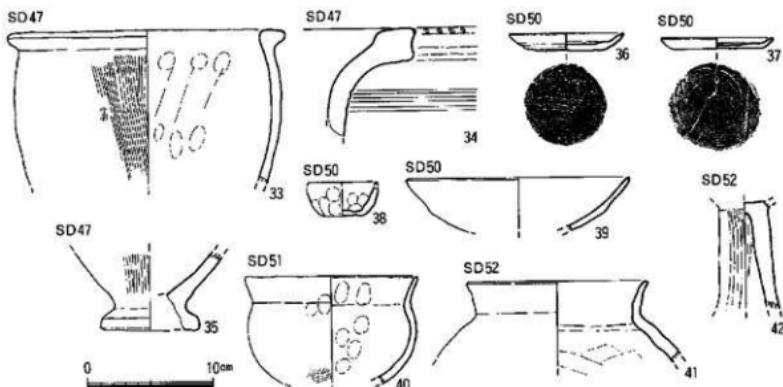


Fig.14 各溝出土遺物 (1/4)

規模は24~40cm、深さは15cm前後を測る。溝埋土は黒褐色粘質土を主体し、下層に黄橙色地山粘土ブロックを含む。SD58・SK55を切る。

出土遺物 (Fig.14~17) 弥生土器から土師器の破片が出土している。大半が細片で、図示できるものは少ない。40は古墳時代前期の鉢の口縁部片。復元口径13.6cmを測る。磨滅はかなりひどいがナデか。外底下半にハケが残る。胎土に赤色粒子を含む。75は黒曜石製の凹基の石鎌で、基部を欠損する。

SD52 (Fig.13, PL. 1-⑤)

SD50からやや西に振れる南北溝で、規模は約50~70cm、深さは20cm前後を測る。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。底面より浮いた状態で小礫があった。3区では西側でSD62と接し、溝の北半ではピットが切り込む。

出土遺物 (Fig.14) 弥生土器から古墳時代土師器・須恵器、中世青磁、石器の剥片などがややまとまって出土したが、図示できるものは少ない。41・42は古墳時代の土師器。41は壺口縁部1/6片。復元口径14.4cmを測る。やや磨滅するが、外面ハケ、胸内面はケズリ。胎土に粗砂を多く含む。42は高輪筒部。赤色粒子を含む。

SD62 (PL. 1-⑦) 3区で検出したSD52と接する溝。幅35~60cm、深さは最大で20cm弱である。

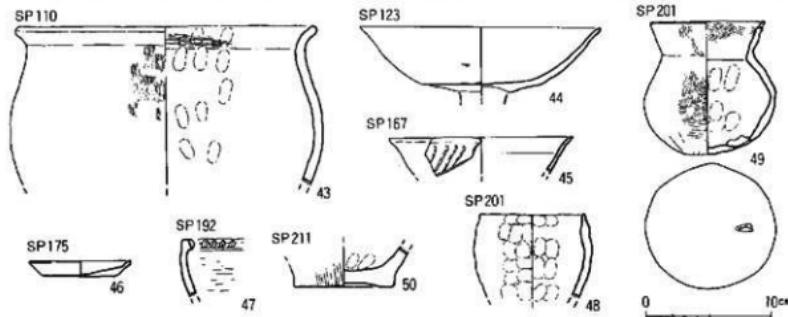


Fig.15 ピット出土遺物 (1/4)

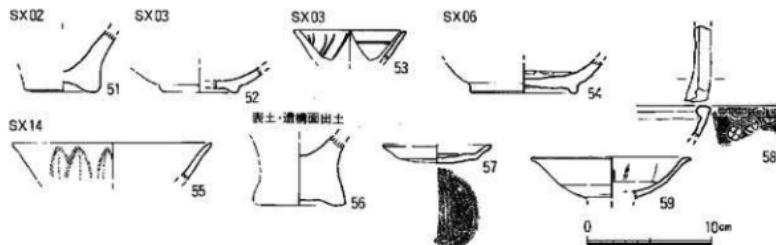


Fig.16 その他の遺構出土遺物 (1/4)

埋土は黒褐色粘質土を主体とする。方向的にみて S D52 の延長の可能性を残す。

ピット及びその他の遺構出土遺物 (Fig.15・16・17, PL. 3-②)

北側調査区では中世段階に地形改変を受けたようである。一度地山を削り、そこに黒褐色の遺物を含む土で整地し、填圧している。地山面に遺物が入り込み、不定形の浅い土坑状およびピット状を呈す、落ち込みがあちこちで見られた。これらを S X (不明土坑)・S P として遺物を取り上げた。

ピット出土遺物 43~50は土器。43は S P 110出土の弥生土器の鉢口縁部1/8片か。復元口径23cmを測る。外面磨滅するがハケ、内面はナデ。44は S P 123出土の土師器の高环環部で19cmを測る。磨滅がひどいが、外面ハケが残る。胎土に赤色粒子を含む。45は S P 167出土の白磁碗口縁1/8片。外面に櫛描き状の施文を加える。46は S P 175出土の上師器皿1/3片。復元口径8cm、器高1.3cmを測る。外底は回転糸切り。47は S P 192出土の突帯文土器片。外面板ナデ。48・49は上師器で S P 201出土。48は手づくね上器の椀形の鉢1/3片で、復元口径8.5cmを測る。49は小型丸底窓で完形、口径9cm、器高10.6cmを測る。底部に径1.2×0.3cmを測る。胴部外面から口縁内面までハケ、胴内面はナデ。焼成は良く、黒斑がある。50は S P 211出土の弥生土器の窓底部片。外底はやや上げ底。69・70は石器。69は S P 80出土の抉入片刃石斧。何度も再使用したような製品である。全長10.6cmを測る。70は S P 208出土の肩平な凹石。全長8.7cm、幅6.4cmを測る。上面中央に使用痕がある。石材は砂岩。

その他の遺構遺物 51は S X02出土の弥生土器の窓で上げ底の底部片。52・53は S X03出土。52は黒色土器の窓底部1/4片。復元高台径6.2cmを測る。53は白磁の小碗口縁1/6片。復元口径9cmを測る。外面ヘラで片影りされる。54は S X06出土。越州窯系青磁の窓底部1/3片。復元高台径8.4cmを測る。内底見込みに日痕がある。55は S X14出土。竜泉窯系の鏡蓮弁の青磁口縁部1/6片。復元口径15.8cmを測る。輪はやや厚めにかかる。56~59は表土・遺構面出土。56は 1D 区出土の弥生土器の窓底部片。底部は厚手で上げ底。57は 1・2 C D 区遺構面。土師器の皿1/3片で、復元口径8.7cmを測る。底部板目圧痕が残る。焼成は良い。58は表土出土の瓦器の火舌の細片。方形を呈すと思われる。外面はスタンプで施文する。59は 1A 区出土の端反りの白磁の皿1/8片、復元口径12.8cmを測る。65~67・68・71は石器。65は S X02出土の砂岩製の砥石。全長13.3cmを測る。66・67は S X06出土。66は石包丁の未製品。紐通し孔の痕跡が2か所残る。粘板岩製か。67は9.5×8cm、厚さが3cmの平面が卵形を呈す扁平な磨石。上面と側面は磨滅し、上面はやや窪む。68は遺構面出土の滑石製石鍋の転用品。用途は不明。長さは8.8cmを測る。71は砂岩製の敲石。全長7.2cm、重さ130gを測る。上下両端に使用痕がある。

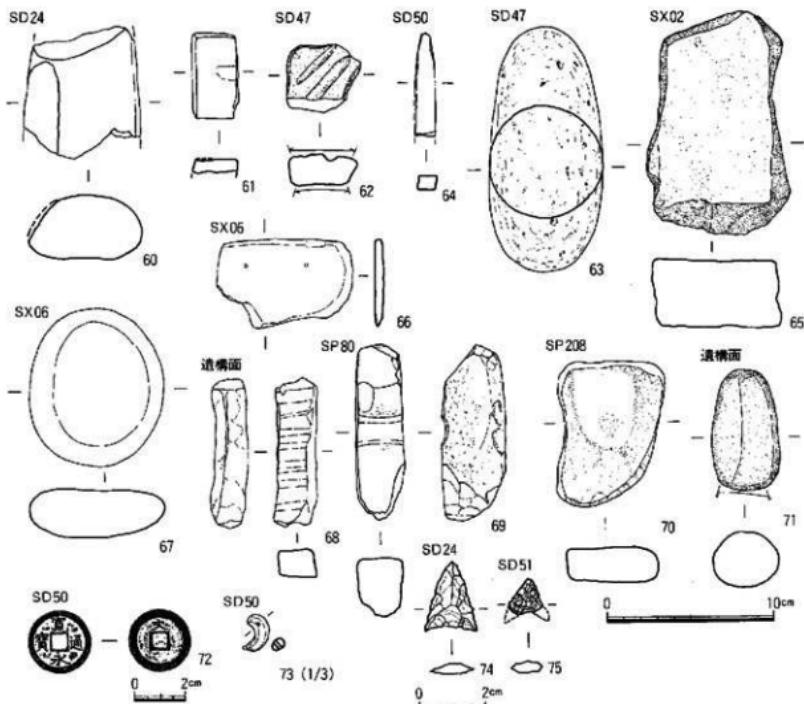


Fig.17 ピット・その他の遺構出土遺物 (1/3・1/2・2/3)

3. 小 結

今回の調査で得られた成果は、弥生時代前期初頭の夜白II b・板付I式並行期の遺構（SK57・60）が見つかったことである。東側の第3次調査原深町遺跡の旧河川で出土している遺物の出所がこのあたりの可能性が強い。原遺跡群では弥生時代の遺構は遺跡全城に確認されてはいるが、点在する程度である。前期の遺物については各地点で出土を見るが、遺構は第16次地点で前期の住居址と貯蔵穴が確認されているのみである。前期の集落は遺跡群の南側第1次・16次・17次地点を中心とする地域に分布する可能性がある。また壺棺の破片も出土しているので、墓地の存在も予想出来る。中期の遺構は第17次地点（主に土坑群）も含め遺跡全城に点在するが、集落の中心は北側第13次・2次・5次・8次地点周辺であり、壺棺墓地も第8次地点で確認されている。1基の壺棺からは鉄矛1が副葬されていた。後期の遺構は第9次地点で初頭の溝が確認されているだけである。調査で検出された住居址は遺物の出土がなく時期は決めかねるが、形態的または周辺の出土遺物から見て古墳時代前期頃の時期であろう。溝については弥生時代（SD24・47）、中世（SD50～52・62）、それ以降（SD01）となる。原遺跡群の調査は調査力所がまだまだ少なく、西側の拠点集落の有田遺跡群と、東側の拠点集落の飯倉遺跡群との関係など、まだまだ不明な点も多い。今後の調査の成果に期待したい。



(1) 調査区全景（南から）



(2) 調査区南側（北から）



(3) 調査区北側（北から）



(4) 調査区南西側・SD24（東から）



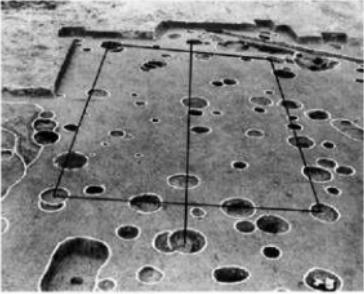
(5) 調査区南東側 遺構検出状況（北から）



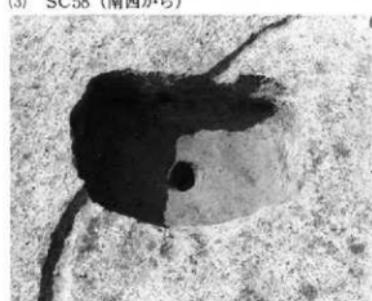
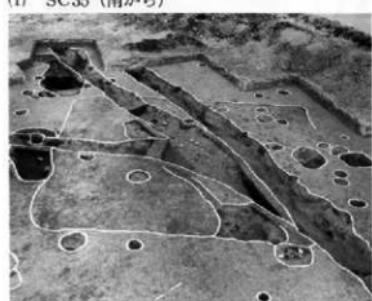
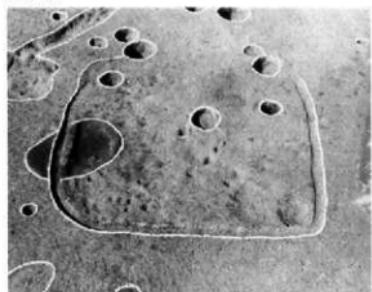
(6) 2区全景（西から）



(7) 3区全景（西から）

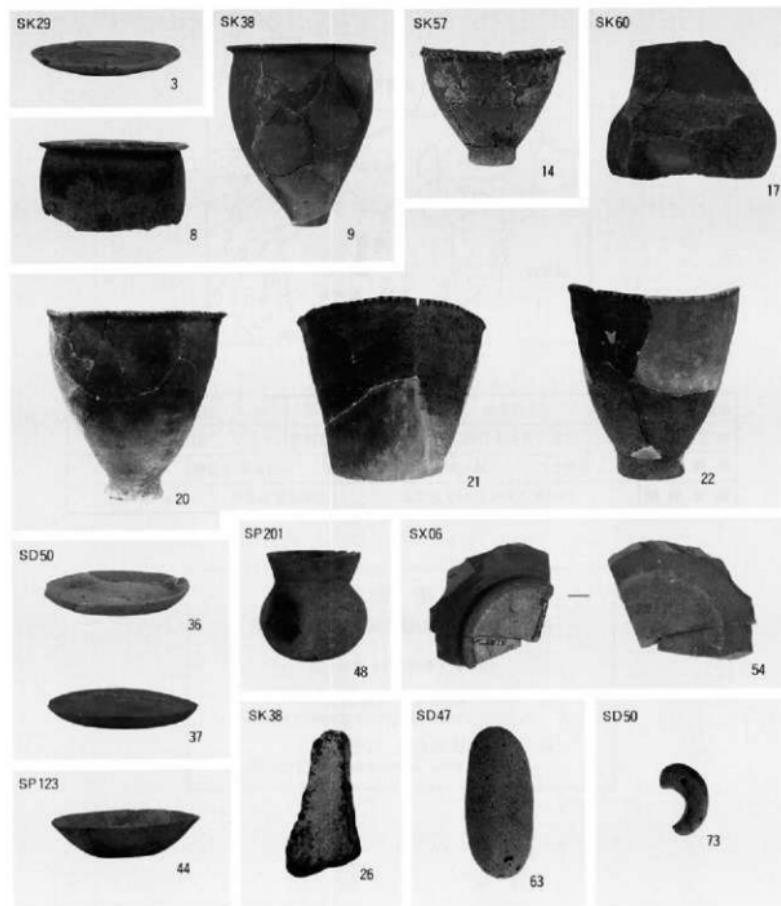


(8) SB64（南から）





(1) SK60 (西から)



(2) 各遺構出土遺物 (縮尺不統一)



遺跡調査番号	9460		遺跡略号	HAA-17	
調査地地籍	早良区原七丁目881-1		分行地図番号	082-0311	
開発面積	2,881m ²	調査対象面積	550m ²	調査実施面積	730m ²
調査期間	1995年2月6日～3月22日		事前審査番号	6-2-287	

原遺跡8
福岡市埋蔵文化財調査報告書 第444集

1996年（平成8年）2月14日

発行 福岡市教育委員会
〒810 福岡市中央区天神1丁目8の1
印刷 株式会社 三光
〒810 福岡市中央区大名1丁目2-20

